

11 月第 3 週の礼拝説教

■日 時：2025 年 11 月 16 日（日）10：30～11：30 降誕前第 6 主日礼拝

■説 教：保科けい子牧師

■聖 書：新約：マルコによる福音書 13 章 3～13 節（新約 P88～89）

■説教題：「最後まで耐え忍ぶ者」

■讃美歌：51（愛するイエスよ、われらここにあり。）
226（輝く日を仰ぐとき、）

先週の金曜日11月14日の新聞の一面に、大きな見出しで「ガザ 見渡す限り廃墟」とあり、「2 年以上に及ぶ戦闘の影響で、ガザ市近郊の街は廃墟となった。住民の姿も確認できなかった。」という説明文と共に、おそらく水色の地中海をバックにしていると思われる一面の灰色の瓦礫と化した風景の写真が掲載されていました。今、世界中から関心を寄せられているガザとは、西を地中海、南をエジプトに接する「パレスチナ自治区ガザ」の中にある街です。そして、「パレスチナ自治区」とは、1994年以来、その「ガザ地区」と東をヨルダンに接する「ヨルダン川西岸地区」に分かれています。その二つの地区の真ん中を南北に縦長に位置するように「イスラエル」があります。2003年以降、その二つの自治区とイスラエルを分離する壁が建設され続けており、特に「ガザ地区」はよく「天井のない監獄」と表現されるような状況にあります。私がイスラエルを訪れたのは1999年ですが、その時はまだ壁はなく、行き来が自由でした。ベツレヘムの聖誕教会では、PLOのアラファト議長が例年クリスマスの礼拝に出席するという説明を聞いたのを覚えています。それから25年の時が流れ、ガザは廃墟の街となっています。

さて、本日の聖書箇所マルコによる福音書の13章は「小黙示録」と呼ばれています。主イエスが終末のことについて語っているのです。そして、続く14章からは、いよいよ主イエスが十字架につけられることになります。ですから、13章では、主イエスが終わりの日の救いの完成がどのようなものなのかを語って、ご自身の教えを締めくくっていると考えられます。本日は読みませんでした。13章の1節,2節には、エルサレム神殿での主イエスと弟子たちのやり取りが記されています。弟子の一人が、神殿の素晴らしさに目を奪われたのです。この時のエルサレム神殿は、ヘロデ王の大規模な改築によって、広い境内と大理石の床のある本殿をもつ荘厳な建物でした。イスラエルの全国各地から巡礼にやって来ていた人々は、そのようなエルサレムの神殿のあまりの荘厳さに圧倒されてしまったと言われています。主イエスの弟子たちも例外ではなく、感嘆の声を上げています。しかし、主イエスは「これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない」、つまり跡形もなく崩れるのだとおっしゃったのです。実際に、エルサレム神殿は、ローマ帝国の手によって、紀元70年には徹底的に破壊されています。

3節以下で、弟子のペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかに主イエスに尋ねます。「おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、そのことがすべて実現するときには、どんな徴があるのですか」。弟子たちが語る「そのこと」と言うのは、「神殿の崩壊」のことであると共に、世の終わりの終末のことと考えられます。弟子たちは、これだけ大きく荘厳な神殿が崩壊するというのであれば、その時は世の終わりであるに違いないと思ったのでしょう。大災害や戦争などが起こると、世界は終わるのではないかと恐れる思いは私たちにもあることです。ですから、終末のしるし、終末の時をぜひ知りたいたい、私たちも考えます。そこで、主イエスは話し始められます。「人に惑わされないように気をつけなさい。 わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』と言って、

多くの人を惑わすだろう」。多くの偽預言者が登場するというのです。さらに言うならば、「わたしこそイエス・キリストの生まれ変わりである」と名乗りをあげて、人々を煽動する教祖のもとに多くの宗教が生まれています。まさに、20世紀から21世紀にかけての社会状況を指摘されているような思いがいたします。

さらに続けて、主イエスは、「戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる」と語られています。この言葉を聞いて、私たちは、今がその時かもしれない、と思います。世界を見渡せば戦争や内紛があります。まさに、民と民、国と国の間に争いがあるのです。さらに、「地震」「飢饉」と言われている自然災害も、私たちの身近なこととして起こっています。私は、自分自身のこととして経験した2011年の東日本大震災のときのことを、今でも忘れることはできません。そのような天災だけではなく、人間の身勝手な行いは、地球に壊滅的なダメージを与えているとさえ言われています。また、日々見聞きする様々なニュースは、私たち人間の心の荒廃を表しているのではないのでしょうか。つまり、ここで主イエスがお語りになっていることは、これからの将来においてはもちろんのこと、これまでの人間の歴史において、そして、今私たちが生きている現在において起こっていることなのです。

さらに、12節では次のように言われています。「兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう」。ここで語られていることは、目を覆いたくなるような事柄です。しかし、深く考えてみれば、それらのことは、私たちが今、直面していることであるとも言えるのではないかと思います。主イエスは、もし私たちが直面したら、世の終わりと思ってしまうような事態をお語りになった上で、「そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない」とおっしゃるのです。そして、9節で「あなたがたは自分のことに気をつけていなさい」とあります。様々な噂が飛び交い、心乱されることが起こる時に、それらに惑わされるのではなく、自分のことに気をつけていなさいとおっしゃるのです。それは、自分がしっかりと主なる神の救いに生かされているか、主なる神の恵みを見失うことなく歩んでいるか、ということを確認しなさいということではないかと思います。もちろん、それは、自分と神様のことだけに關心を持ち、そのほかのことはどうでもよいというわけではありません。神様の救いのご計画が世を導いておられるという確信にしっかりと立たせていただけるように、いつも目を覚ましていなさいとお語りになっているのではないのでしょうか。

ある方は、次のように語っています。「主の恵みに生かされて、人の言葉に惑わされることなく、救いの御業を信じつつ歩んでいるのであれば、そこでは自ずと、この世の現実の前でなすべき事が示されます。その事が9節の後半に記されています。『あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる。また、わたしのために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。』」。ここに記されていることの背景にはキリスト者が迫害されている状態があります。しかし、主イエスは、単純に迫害に合うことを予告したわけではありません。続く箇所にも、『しかし、まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられなければならない』とあるように、要するに、福音を語るということを言いたいのです。福音を語るというのは、世に人の言葉が蔓延する中で神の言葉を語ることに他なりません。そこでは緊張が生じます。それが、迫害の時代であれば、実際にここに書かれているように、引き渡され、打ちたたかれることも起こるかもしれません。しかし、迫害の時代であれ、迫害の無い時代であれ、御言葉に立った歩みをするようにと語られているのです。」

11節にまいりましょう。「引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は話すのはあなたがたではなく聖霊なのだ」。この御言葉を読むときに、私はいつでも、日本でも戦争中にキリスト教会が迫害され、何人もの牧師たちが捕らえられたことを思い浮かべます。その中には獄死した方もおられたのです。その時の状況は、まさに12節から13節前半の「兄弟は兄弟を、父は子を死に迫いやり、子は親に反抗して殺すだろう。13 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。」という御言葉が語っているそのままの状況でもあったと語るご高齢の関係者の言葉を思い出します。しかし、それらの方々が心に刻んでいたのは、この聖書の御言葉であったということも語ってくださったとき、御言葉の力ということをお知らせされました。ですから、この御言葉を読むたびに、福音を伝えようとして御言葉を語っているつもりでも、実際は自分の言葉や考えを語ることになってしまいうことが多いいことを反省させられます。私たちはいつでも、聖霊の働きを祈り求めつつ、自らを通して生ける主が働いて下さるように祈り求めていく中で、話す言葉が与えられることを信じて歩み続けたいと思います。主イエスは、そのような私たちの歩みを「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」と励ましてくださっているのです。